

英語コミュニケーション能力育成に 効果的な授業活動を探る —学習者に焦点をあわせて—

萩野 博子

1. はじめに

国際化が加速度的に進展する今日、あらゆる分野で外国人との交流や取引の機会がふえている。個人レベルでも海外旅行、研修、留学、出張、駐在等で、人々が外国人と対面し、国際語である英語を通じて意志の疎通をはかる場面 (face to face communication) に遭遇する機会が増えている。

現在の日本の平均的大学生の英語伝達能力を考慮すると、一般教養としての一年生の英語の授業は、実際のコミュニケーションの必要が生じた場合、人に頼らずに対処できるだけの知識、伝達能力 (Survival English) の習得を目的とすることが妥当と思われる。

欧州では外国語を数か月習っただけで、その言語をある程度使えるようになる人がいたりする。これは言語間の類似性もさることながら、地理的、経済的要因も多い。目的言語の話される環境に身をおくことや、その言語を社交、仕事にすぐ活用する機会が多いからである。

言語能力向上を考える際には、学習 (Learning: その言語の文法と語彙に関する知識を増やすこと) と、習得 (Acquisition: その言語を運用する能力を身に付けること) は別の過程であることを区別することが重要である。例えば、三人称単数形 '-s' の規則は簡単だが、習得は遅れがちで誤りが多い¹⁾。

さて言語が習得されたためには、何が必要であろうか。クラッシュェン²⁾によれば、学習者の能力よりも少々高めの理解可能なインプット (言語入力)、即ち目的言語での刺激が与えられることが第一に必要である。つぎにこれが受け入れられる (intake) ためには、これをさえぎる学習者の情意フィルターが低い方がよい。受け入れられた言語刺激は、チョムスキーが生得のものと説く言語習得装置³⁾ (Language Acquisition Device) に内在化される。外国語

による出力（アウトプット：発話，意志伝達）の間違いを自己修正する過程が，文法，語彙の知識の適用であるモニターである。伝達能力習得のためにはコミュニケーションの手段として言語を使用することが前提である。

オーラル・イングリッシュの授業では英語のコミュニケーション能力育成を有効に行なうべく様々な教材と教授法を取り入れている。その効果および学生側からみた評価を検討するために，前述の仮説を考慮に入れ，各種教室内活動に関するアンケート調査を行ない，その結果を分析した。その結果を述べる前に，オーラル・イングリッシュの授業目標，背景と内容，並びに学習者の背景を明確にしてみたい。

2. 授業目標

(1) オーラル・イングリッシュの授業が主眼とする英語能力

オーラル・イングリッシュでは，その名を示すとおり，聞きとる力，話す力 (aural-oral skills) を伸ばすことを主眼としている。内容としては，日用雑事を英語で処理するための知識と能力 (life skills)，外国人の考え方や行動様式の知識 (cultural knowledge)，また英語習得過程で生じる中間言語であるブローケン・イングリッシュの使用 (pidginization)⁴⁾ が固定化 (fossilization)⁵⁾ するのを防ぐための文法運用力の育成もめざしている。

(2) 口頭での英語伝達能力の構成要素

口頭英語でのコミュニケーションのためには以下の能力が必要である。

1. 聞こえてくる音声を英語の音声のまとまりに分けて捉えられること。
2. まとまりとして捉えられた音声，即ち英単語の意味を認知あるいは，推論により理解する能力。推論には周辺の英単語群—英語文脈（言語音声）—からヒントを得る場合と，発話がなされた状況（非言語的情報）からヒントを得る場合がある。
3. 情報あるいは伝達に対して自己の意見を形成し，態度を決定する。
4. 意見あるいは態度を表明する。これは非言語的なジェスチャア，表情だけの時と，これに言語を伴う場合，言語だけ（一語文，より長い発話，文書）の場合がある。

3. 学習者の背景

(1) 英語の基礎知識

大学に入学してくる学生は中学・高校で既に6年間の間，英語を学習してきたのであるから，原則として基本的な文法あるいは構文および単語の知識

があり、全くの初心者とは違う疑似初心者 (false beginners) である。

*精読と情報処理速度

中学・高校の英語の授業は文法中心のシラバス (カリキュラム) のもと文法・訳読式教授法 (grammar translation method)⁶⁾ で行なわれている事が多いのではないであろうか。テキストの英文の文法を分析し、単語の意味を辞書の日本語訳に頼って知り、丹念に解釈するといった精読中心の学習の仕方では、言語を理解する速度もゆっくりしており一定の時間内で処理する言語情報量は少なくなる。平均的な学生が、数秒の内に伝達が行なわれる口頭でのコミュニケーションのスピードについていけなかったとしても、不思議ではない。

週3時間、6年間の英語教育で、どの程度の量の口語英語に学生達が接してきたかが問題である。ここ数年、英語を母国語とする大勢の外国人が中学・高校の英語教育に動員されているが、この刺激により内容に変化が生じているようである。また優秀な日本人教員の方々の努力により、カリキュラムもコミュニカティブな内容にかわりつつあるようだ。

*口語英語への親しみ

英語の音韻、抑揚、強勢リズムや弱化や口語体独特の表現に親しんでいないと口頭英語の聞き取りは容易に行なわれない。語彙の面でも文法の面でもとりたてて難しいとは言えない英語の発話を学生が理解できない場合は、こうしたことが原因となっているといえよう。

(2) 英語での発話上の問題点

*音韻上の問題

学習者が英語で話す時に問題となるのは、発音が英語の音韻、強勢アクセント、ピッチ、弱形を実現せず、伝達に支障を来す場合である。

今日、日本語には大量の英語の単語が借用され入ってきている。例えば「オレンジジュース、ドレス、アイロン、ラケット、ビタミン」等。こうしたカタカナ化された単語は、発音が原語とはかなり違うことが、あまり認識されず、安易に日本語の音韻のまま使用される傾向がある。

*口頭での発言に不慣れな事

英語での口頭での問いかけに対して答えられなかったり、完全な文を用いて答えることが出来ず、間をおいた後、一語で答える学生が初期には多い。一語での応答は学習者の英語力が限られていることによる中間言語⁷⁾ であって、発達途上の基礎的段階にあることを示す。

英語での発話が出来にくいのは、日本語と英語の間には語彙の面でも、構

文の面でも共通要素がほとんどない事が、重要な原因の一つと考えられる。また、学習者がうけてきた教育が、受験の影響もあってか、おそらく、与えられた答えの中から正解を選ぶ多項式選択問題や正誤を問う問題に答えるといった受動的な言語活動の訓練を中心としていることも関係があるように見受けられる。自己の意志、意見を他者に伝えるための発話や、文を書くといった能動的な言語の使用の訓練が望まれる。

4. 習得の障害となる各種限定要因

(1) クラスの人数

一定の時間の限定のなかで、1クラスの人数は教師対各学生との間のコミュニケーションの濃度の濃さに反比例すると言えよう。もし教師が学生と一対一のコミュニケーションをしようとするなら、各人との対話×人数分の時間を費やすことになる。

一般的に、クラスの数が多いと、個人個人が授業へ参加しているという意識が希薄になる傾向があるようである。このような場合、他の考え事をしたり、無だ話をして、学習活動から退いていても分かりはしないだろうという見方をする学生もいるように見受けられる。

(2) 授業の頻度

週一回という授業の頻度の場合、次の授業までの間隔があるため、その間に学習、習得内容の忘却が生じる。

(3) 学生の勤勉度

学生が授業の時間外に予習、復習すべきとして与えられた課題を怠らずにやってくるかどうかにより学習内容の定着が左右される。

(4) クラスの時間以外に英語に接する時間

学生は英語圏に住んでいないので、教室外で英語を使用する機会に恵まれていない。ただし、学生がその機会を積極的に求めるなら、受け身的な英語との接触は今日の日本では比較的たやすく得ることができる。

例：FEN、バイリンガル放送によるニュース、映画や報道番組等。

(5) 学生の情意フィルター

学生が英語に対し、「難しい、面倒」、あるいは「英語使用が気恥ずかしい。ネイティブのような発音はきざぎざ。」といった気持ちを抱いている場合、情意フィルターが高くなり、英語習得の妨げとなる。

(6) 学生の動機づけ

学生の英語への興味、英語習得への願望が低い場合。単位のため科目を選

扱したが、英語を必要と感じる意識が薄く、現在の日常生活で英語を必要とする切迫した事情がないため、英語習得に大きな価値を見い出さず、学習に身をいれないことがある。

5. 教材の適切性

前述の授業目標と学習者の背景を考慮すると望ましい教材の在り方が明らかになる。

(1) 自然な口頭表現を多く含んだ音声教材

ヒアリング、スピーキングの能力を向上させるには、英語の音声のインプットを多く与える事が必要である。

(2) 文法分析能力よりも文法運用力養成に有効な教材

英語で話すときにピジン（ブローケン・イングリッシュ）にならないようにするためには、文法を内在化（internalize）⁸⁾させ、それが発話文の形成段階で運用されるようにするか、自己の発話を聞いて誤りを修正するモニターリングを行なう必要がある。こうした能力の訓練のための演習を自然に内容に盛り込んだ教材が好ましい。

(3) 実用的な語彙の増強

負担がかからずに、需要が高く、実用的な語彙をたくさん習得させる工夫のある教材。視覚的、感覚的な刺激やヒントのある教材。

(4) 機械的でなくコミュニカティブな演習ができる容。

(5) ペア、グループで演習できる内容。

(6) 学生に難しい、つまらないといった先入観を抱かせない教材。

6. 教授法

以下は授業のシラバス構成の際に参考にしてている教授法である。

(1) 文法・訳読式教授法（Grammar Translation Method）

書かれた文の内容理解を目的とする教授法。文法の分析と単語の母国語訳を中心に学習を進める。

(2) 認知学習アプローチ（Cognitive Code Approach）⁹⁾

言語学習が精神的過程である事を重視。学習者の積極的参加を促す。

(3) オーディオ・リンガル教授法（Audiolingual Method）¹⁰⁾

話したり、聞いたりすることに重点を置く。対話の繰り返しによる暗唱や、パターンプラクティス等の機械的ドリルを用いる。

(4) ナチュラル・アプローチ（Natural Approach）¹¹⁾

文法・訳読式教授法の反動で生じた一連の教授法。意味や構造を教える時に、動作等を行なう。例えば言語刺激に対して全身での行動での反応を要求する (Total Physical Response)¹²⁾ 教授法等。発話を強要せず、学習者の誤りに寛容。

(5) ヒューマニスティック・アプローチ (Humanistic Approach)¹³⁾

学生の情動、心理に重きを置き、学生の全人格的参加を促す教授法。

(6) コミュニカティブ・アプローチ (Communicative Approach)¹⁴⁾

言語機能を重視。学習者間、学習者と教師間の対話が行なわれる事を重視。要請、記述、好き嫌い等、言語機能を教える。概念シラバスや、コミュニケーション中心のシラバス構成。

7. 授業内容

前述の目標と教授法を考慮してクラスでは以下の活動をおこなっている。
主教材—構文や基本実用語彙、常識的知識の習得が目的。

*テキスト¹⁵⁾ (Course Book) : 1) 単複の区別、助動詞、三人称単数の活用等を身につけるための簡単な文法、自然の習得順序に近い。2) 職業、住所、レストランなど概念や場面を中心に構成されている。3) 自然なスピードの米語の対話の内容理解やディクテイション(穴埋め、書き取り) 4) 課の構文と話題について生徒が自身やお互いのことを訊ねる対話演習の指示が入っている。

*ワークブック：テキストの構文や概念の復習と強化の為の書く練習。

副教材—自然な速度の口語英語のインプットを理解の手助けになる視覚的刺激とともに与える。現実への画面によるシミュレーション。

*場面ビデオ¹⁶⁾：アメリカの生活場面(空港、ホテル、電話等)の教育ビデオ。実際の場面で使う表現や語彙、言語機能(要請、提案等)の注釈付き。ストーリーはない。各課1~2分ごとの場面複数からなる。一部穴埋め問題になった台詞の表記(transcript)を配り、画面をみながらディクテイションをする。

*ビデオドラマ¹⁷⁾：ストーリーがある。一本のドラマを5~10分ずつに区切り、一学期かけて見る。翌週に見る部分の台詞の表記(transcript)を前もって学生に配布している。前期は教育用に作られたドラマを使用し全台詞を表記したプリントを配り、後期は英語字幕付き(captioned)娯楽映画を採用し、2/3の台詞の表記と語彙の注釈を与えている。

*各種リスニング演習：ヒアリング力の強化のためのリスニング作業

(Task Listening)。項目に印をつけたり、メモをとったりする。テープとの応答練習もあり。

*プリントその他の課題：ペア、グループ活動、寸劇、日本人に苦手な音素の発音演習、ゲーム等。

8. 調査研究

前述の教授法および教材を利用した授業活動の生徒側からみた評価、特に情意フィルターとの関連を調べる為にアンケート調査を実施した。

- (1) 調査期間：平成元年10月16日、23日
- (2) 調査対象：東京工芸大学女子短期大学一年生オーラルイングリッシュ4クラスの学生
- (3) 調査目的と方法： 学生側の英語習得および授業活動に対する意識や評価を調べるため。特に情意的要素と学習内容の取り入れ(intake)の関連をしらべるため4クラスで4つの違う活動を行い、学習内容のテストを行い相関度を分析した。
- (4) 回答数：実施日出席の学生総数117名。一部の質問には回答のないものもあったが、クラスのほとんどの学生からの回答があった。
- (5) アンケートの回答形式：個別の教室内活動について、1) 勉強になる度合い 2) 難しさ 3) 好き嫌い、の3点で100%から0%の範囲で評価を下す形式。また学生の英語習得に対する動機も調査した。
- (6) 調査内容

英語習得の動機

- 1 英語上達の願望
英語の必要性

各授業活動に対する評価

- 2 テキストのヒアリング
- 3 ワークブック練習問題
- 4 場面別教育ビデオ
- 5 英語字幕付き洋画

クラス毎に別々に行なった活動(学習内容：housing, 文法：'do' 'does'を活用する練習)の評価

- 6 理想の家の製図と対話
- 7 グループ作業 (Role Play：家探し 不動産屋と客)
- 8 ペア作業 (Role Play：Mary と不動産屋)

9 リスニング作業 (家探しの電話会話を聞いてメモをとる)

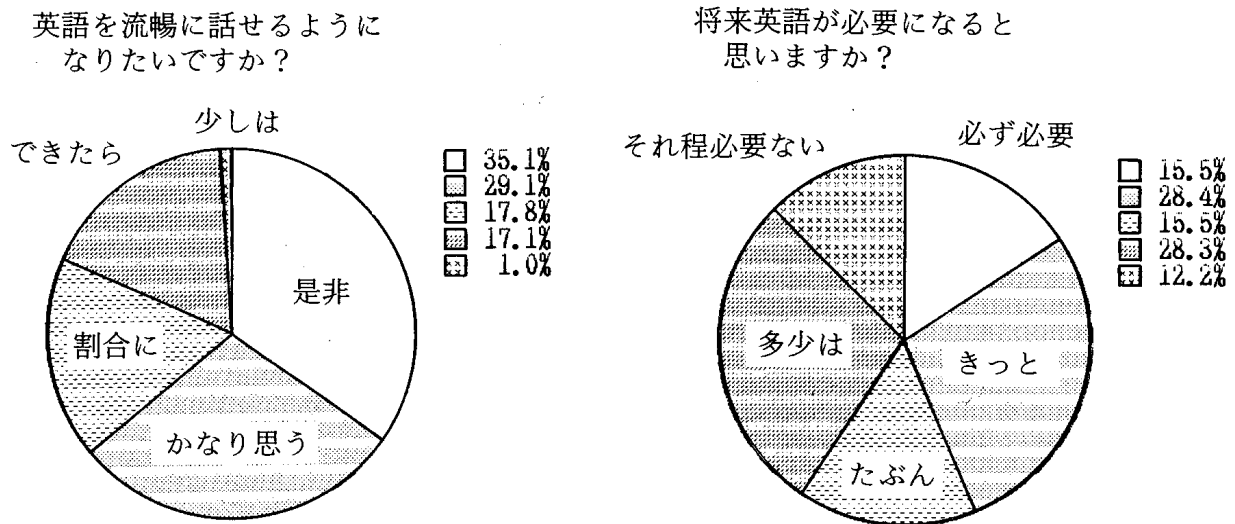
6, 7, 8, 9 に関し, ヒアリングテスト (助動詞と代名詞の書込; 該当物件当て; 電話会話を聞きメモを取る) を行い, 成績との関連を調べた。

9. 調査結果

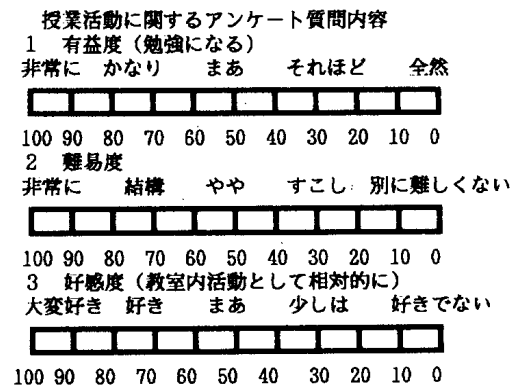
(1) 英語習得の動機

何事を習得する場合も, 動機 (motivation) や必要が強いほどうまくゆくものである。さて本校の学生の場合, アンケート結果は次のようになった。

図1 英語習得の動機



英語を上手になりたいという願望は, 当然のことながらおおむね強く, 約2/3の学生が英語習得への強い願望を持っている。一方, 英語の必要性となると, 40% 近くの者が, 英語をあまり必要とはみなしていない。これは学生の現在の状況が, 英語圏で暮らす外国人や移民の置かれている状況とは違うので無理もない。国際化する世界と彼らの余生の長さからして, 英語が将来必要になる可能性は十分あることを示し学習の意義を強調したい。同時に授業が彼らの習得の大きな手助けとなり, かつやりがいのある内容であると彼らが感じると, 学



習効果が高まるであろう。

*以下は8つの活動に関する調査結果であるが、いずれについても最高100%とし、該当する目盛りまでぬりつぶしてもらった。

(2) テキストのヒアリング

これは授業活動の中でも基幹的な活動であり、学習する構文や語彙、場面や機能が盛り込まれた内容の幾つかの会話のヒアリング、ディクテーションである。米語のテープの速度は、いわゆる外人向けのゆっくりしたもの (foreigner talk) でなく、発音の弱化 (reduction) もはいたった自然な発話である。調査の結果、おおむね役立つ内容とみているが、好感度はそれより少しおとる。難易度は、答えに幅があるが、やや難しいというのが平均値であろう。

(3) ワークブック練習問題

テキストがテープ聞き取りや口頭演習で進められてゆくのに対し、ワークブックは書く練習で、主に宿題としているが、文法と語彙の復習となっている。文法は、獲得された知識で発話をモニターするためなので、中学程度の易しいレベルである。

調査の結果、難易度は低いが、練習が好きでないという回答が多かった。その割りには有益と

図2 テキストヒアリング

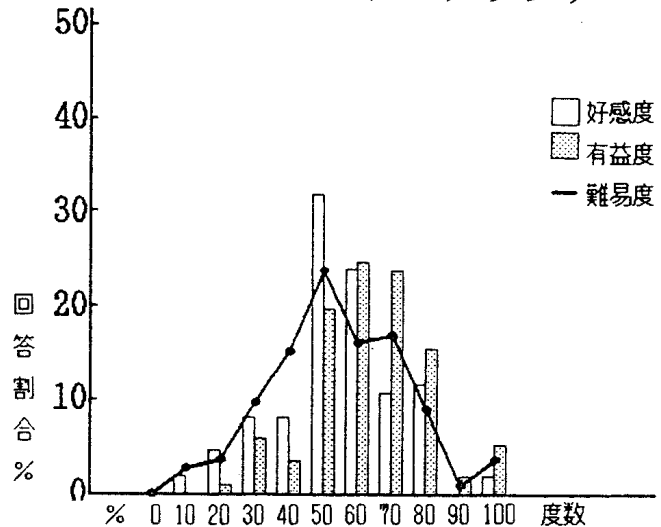
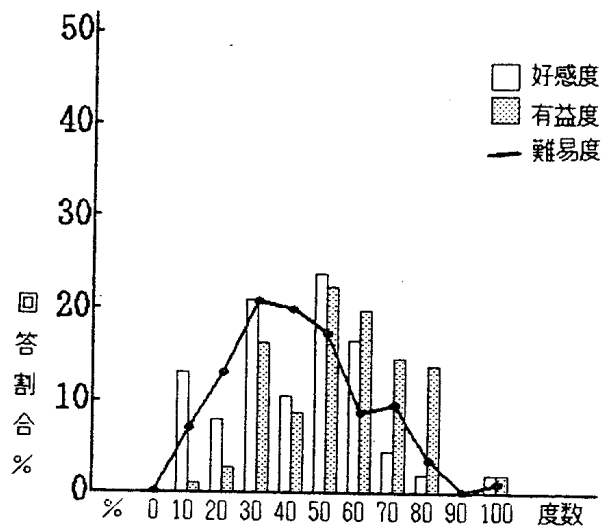


図3 ワークブック練習



みなす者が結構多かった。しかしそれ程でもないという意見もややあった。基本のおさらいに意義をみいだすものの伝統的な書く問題演習は嫌いという傾向なのであろう。

(4) 場面ビデオ

アメリカを舞台にした生活場面ごとに分かれたビデオ教材の視聴を有益とした者は多い。教材を易しいとした者が少ないが難しいとした者も少ない。これは画面からヒントをえられる為と見られる。やや難しいとした者が多い。比較的好きとした者が多く、好評といってもよい。全般的には、オーディオテープや対話中心のテキストより高い評価である。

(5) 英語字幕付洋画

Kramer vs. Kramer を今学期は使っている。俗語が多く台詞のテンポも早いせい、難しく感じている者が多い。にもかかわらず大好きと答えている者が多い。これは教材として制作されたものでなく娯楽映画であるためと思われる。学習に役立つという評価は全般に場面ビデオより低い。

*以下は今回調査のために準備しクラス別に行なった学習活動の内容とその調査結果である。

これらの活動は教科書の7課の学習事項である住まいに関する語彙とその省略形や助動詞、特に“does”の運用、家やマンションを主語にした三人称単数形を使う練習。ex. “How many bedrooms does it have?”, “Is it furnished?”

図4 場面ビデオ教材

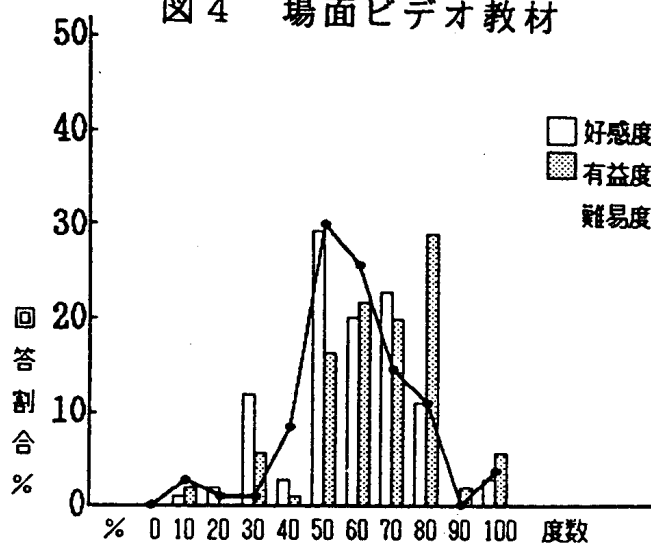
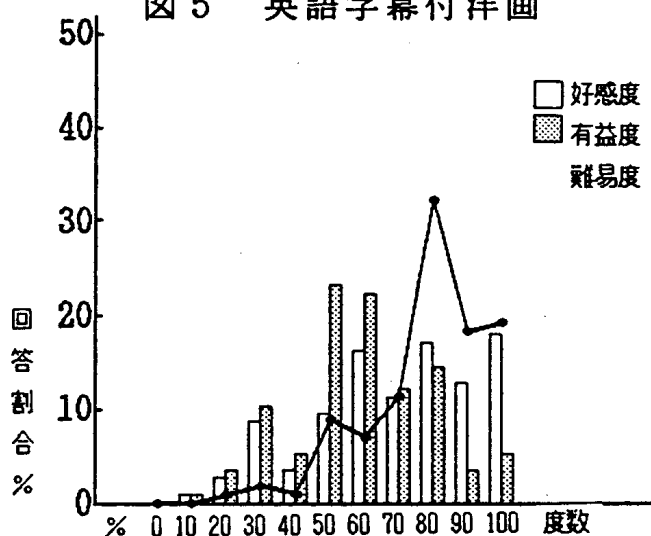


図5 英語字幕付洋画



(6) グループ作業

4名の学生での Role Play。インフォメーション・ギャップがあるように2

場面 (situations) Real Estate Office
機能 (function) Look for a suitable apartment

Client

予算と希望を伝える。

List to check OK or No

A couple with a baby

- Number of bedrooms 2
- Number of bathrooms 1-2
- Large living room
- Furnished
- Sunny
- Air conditioning
- Parking
- Neighborhood Safe
- Neighbors Quiet
- Rent \$600-\$800
- Utilities

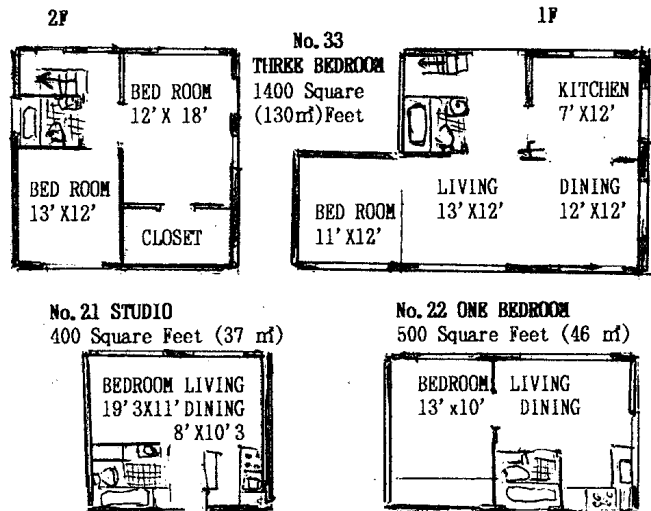
C Young Couple

- 1 bedroom apt
- Near City Center
- Neighborhood safe
- Parking
- Floor good view
- Elevators more than 2
- Rent \$400-550
- Utilities

B Single girl

- Studio
- Furnished
- Air conditioning
- Near transportation
- Near Shops
- Neighborhood safe
- Neighbors
- Rent \$200-300
- Utilities

FLOOR PLANS



Real Estate Agent

物件のリストから適当なものを選び説明。

Floor Plans & discription of housing

- 21 Los Angeles \$250
Unfurn studio, ac, stv, refrig.
Nr trans & shop. elev.
430 S. Union, L.A.
Call Mr. Thomas 213-482-0764
(safe & good neighborhood)
- 22 Downtown sm 1 BR apt. \$350
incl. tuil. unfurn. stv. refrig.
no pets. elev. nr shop
213-323-1465
(3rd floor, old but nice bldg.)

- 23 Los Angeles \$510 incl util.
1 BR furn apt. w/w cpt. ac
Modern bldg 15th fl.
Call Mr. Benett 213-483-3125
(City center, 24hrs security guard)
- 31 Long Beach \$700 incl. util.
furn 2 BR apt, lg LR w/w cpt. ac. pool
Call Mr. James 213-432-3175
(Ocean Front, sunny, nice view)
- 33 Santa Monica \$1000 3 BR house
2 ba. lg kit. garage for 2 cars
524-1732
(sunny garden, patio)

種のプリントを配った。2名が客になり、2名がその対応をする。客役の学生のA, B, Cのどれかの役柄を選ぶ。客は予算と希望を述べ、不動産屋役の学生はリストから適当な物件を探す。その過程で教科書の構文を応用。

調査の結果、多少意見のバラツキがあるものの、かなりの割合の学生がこの活動を100%好きとしている。難易度も70%以上をつけた学生の割合は調査対象の8つの活動中一番低かった。やや難しいという難易度60%が特出し、それ以下の割合が多かったので適当なレベルだったと言えよう。後に実施したテストの平均点は85点で、4クラス中一番高い成績であった。

(7) 理想の家製図と会話

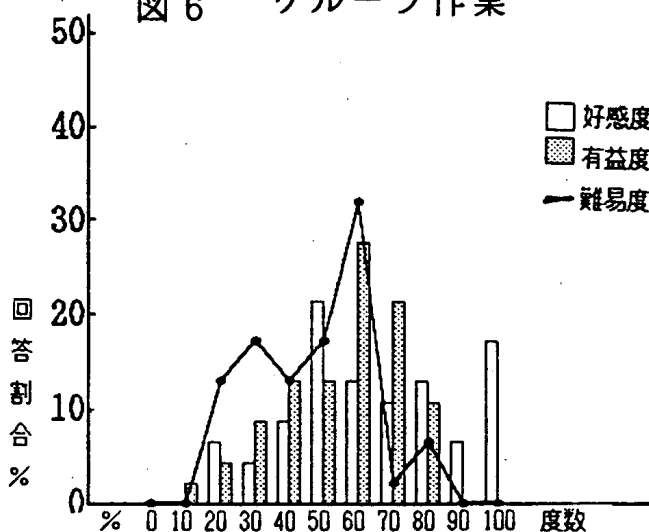
学習者の空想、願望を組入れた Humanistic Approach による学習指導。

好評で、この活動が気に入らない生徒はほとんどいなかった。有益度は比較的役に立つという評価に集中した。教室内を回っている時に押入を英語で何と言うかといった質問をうけたが、図に記入することで、語彙の増強に役立ったと感じた者もいるようである。難易度の評価は3段階に分かれた。

(8) リスニング作業

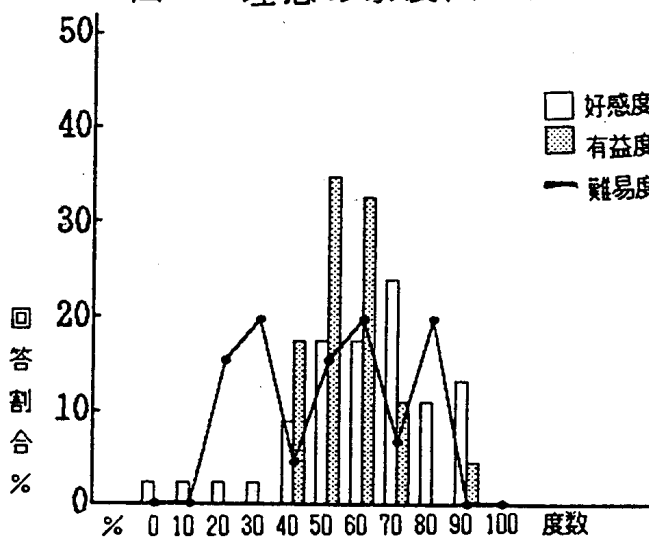
賃貸マンションに関する問い合わせの電話会話を聞きメモをとる作業。こ

図6 グループ作業



Close your eyes and imagine your ideal home.
Then draw the blue print of your home,

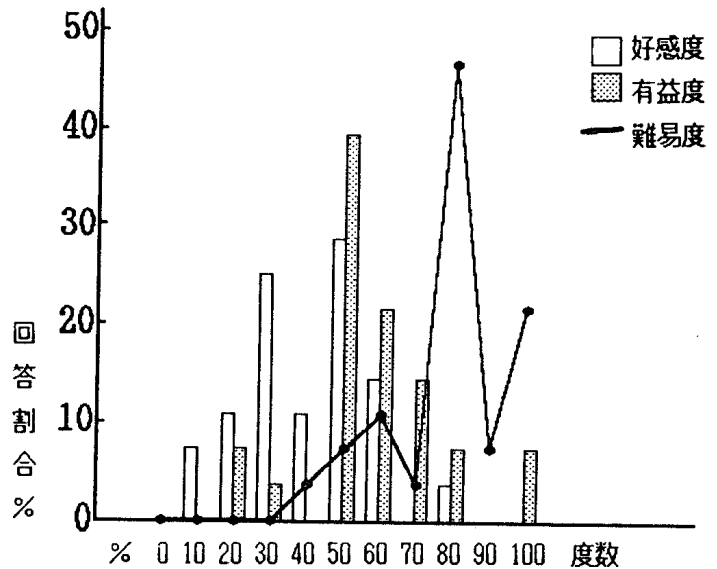
図7 理想の家製図と会話



のあと行なったリアリングテスト問題の一部に類似している。生徒間の対話

図8 リスニング作業

No. of bedrooms:
 Rent:
 Utilities
 Heat?
 Electricity?
 What floor:
 Elevator:
 Washers/dryers?
 Near shopping mall?
 Quiet bldg?
 Who to see:
 Time:
 Other information:



はなく、テープを聞いて答えを書くという受け身の作業。母国語話者間の普通速度の会話だが、音声言語以外にヒントがないので難しいと感じたようである。半分の学生が、難易度 80% とし、1/4 の学生は難易度 100% とした。

不動産屋

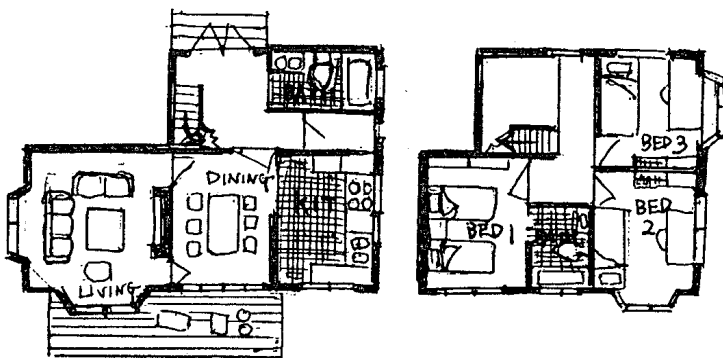
M a r y
 函を見て、M a r y になったつもりで、

家について説明しなさい。

Address: 1560 Hollywood Blvd.
 Los Angeles, C.A. 90026 Tel. (213)486-3041

M a r y の説明をきいて、
 新聞広告文を作成しなさい。

Number of Bedrooms:
 Number of Bathrooms:
 How is the Kitchen:
 Dining Room:
 Living Room:
 Air Conditioning:
 Rent per month:
 Utilities:
 Location(Address):
 Phone Number:
 Others:



またあまり好きでないという
 答えの割合も高い。

(9) ペア作業 Role Play

家を貸すメアリーと不動産
 屋。2種のプリント配布。家
 の説明と賃貸広告作成。

不動産屋の役をした学生に
 にとって賃貸の広告文を省略語
 を使って作成する事が難しか
 ったようだ。難易度に2つの
 ピークがあるが、このことが
 原因と見られる。このピーク
 は好感度のピークとも一致し
 ている。

*ここで4活動の評価
 とテストの平均点を比
 較して見た。これを見
 ると、難易度と好感度
 がほぼ反比例している
 ことが分かる。難しい
 活動は好きではないと
 いう学生の意識が反映
 されている。テスト結
 果の良い順に活動を挙
 げると、一位グループ
 作業、2位ペア作業、
 3位空想作業と会話、
 四位個別リスニングと
 いう順位で、生徒間の
 対話が多い活動ほど良
 い成績を修めている事
 がわかる。有益度の評価は活動による評価の差が少ないが好感度にある程度
 呼応している。

さて8活動全体の評価を比較してみると、クラス平均で学生が一番好意的

図9 ペア作業

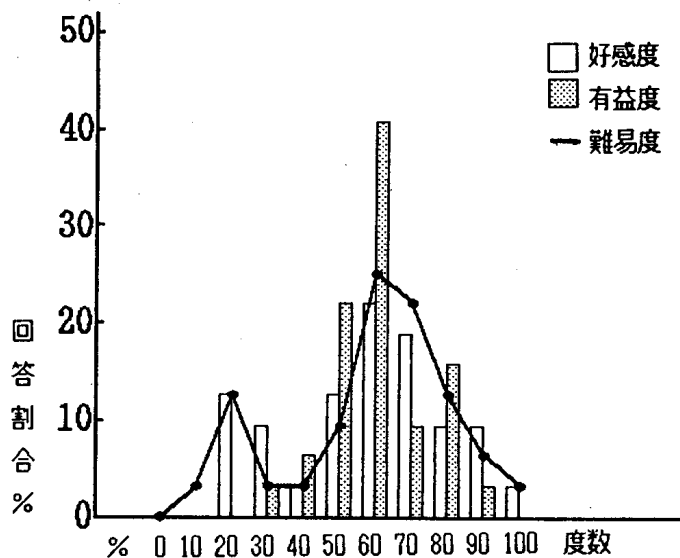
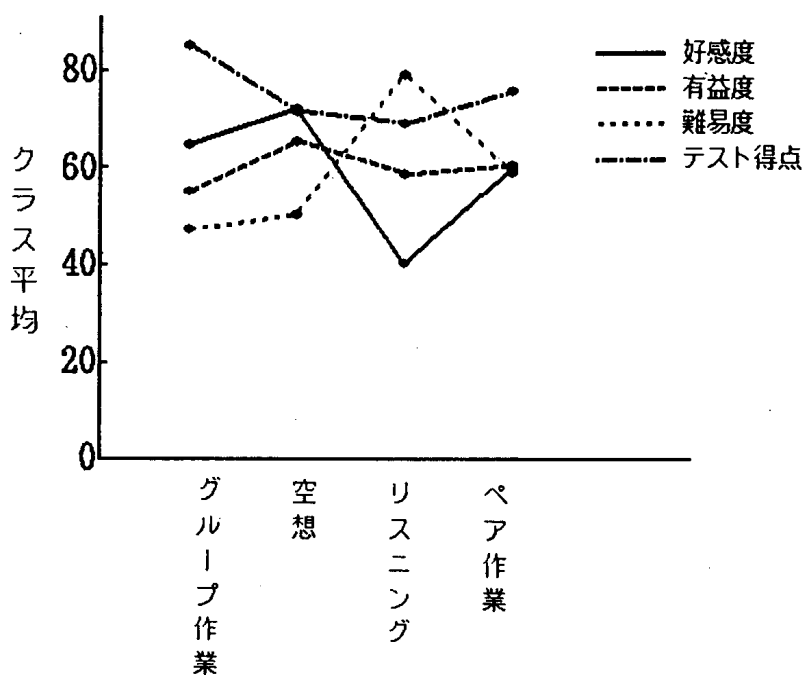
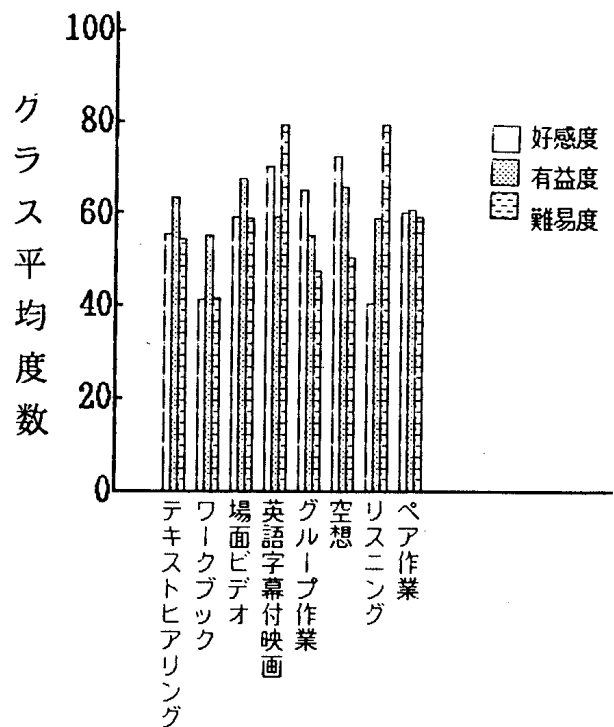


図11 4活動比較



だったのは、Humanistic Approachの理想の家の製図と会話であった。二番目に好評だったのは洋画、三番目はグループ作業であった。逆に不評だったのはワークブック演習とリスニング作業で、いずれもコミュニケーションや感情移入の要素の少ない機械的作業である。全体で見ると、難易度と好感度との関連はない。かたや一番難しかったビデオは好感をもたれているのに、一番易しかったワークブックは不評である。活動が勉強になるかどうかという要素も他との関連が少ない。

図10 8活動評価平均比較



10. 結論

授業活動の評価とテストによる調査およびクラスの観察の結果、判明したことは以下の通りである。

1) コミュニカティブまたは感情の移入、疑似体験的な要素がある活動は、より好意的に受けとめられ、学生の積極的参加を促す。

2) 難しすぎる活動より、生徒が負担に感じない程度の方が学習効果があがる。

3) 言語をコミュニケーションの手段として使う割合の多い活動の方が学習効果がある。

前述の結論は、インプット仮説が日本人学生にもあてはまるということを示している。

前述の結論は、インプット仮説が日本人学生にもあてはまるということを示している。

各活動の評価 (平均率 %)				
	好感度	有益度	難易度	試験成績
Textヒアリング	55.3	63.2	54.1	
Workbook練習	41.1	54.9	41.5	
場面ビデオ	59.0	67.2	58.5	
英語字幕付洋画	69.9	59.0	78.8	
グループワーク	64.7	55.1	47.0	85
空想作業と会話	71.9	65.4	50.2	71.5
リスニング作業	40.3	58.6	78.9	68.9
ペアワーク	60.0	60.6	58.8	75.6

明らかにした。学習には学習者の能力よりも少し高い (i+1) インプットが必要であり、それが効果的に取り入れ (intake) られるには、学生の情意フィルターが低い方が良い。またアウトプット (英語出力) の力を伸ばすには、コミュニケーションの手段として英語を使うことが必要である。一方、間違いを自己訂正するモニターの性能を高めるためには、文法や用法の知識をアウトプットに応用する訓練も必要である。こうした訓練は英文を丸暗記するといった機械的記憶力の劣っている成人の場合に有効と言えよう。

提案

さて、英語を必要とする逼迫した状況がなく、教室外で英語を使用する機会のない環境で、学生の習得を促進させるには、学生に好意的に受け入れられる楽しい教材を、実体験でのコミュニケーションのシミュレーションのような形で与えるのが、望ましい。以下はそのような活動の条件である。

- 1) 言語以外の視覚的、感覚的刺激や、アクションのヒントを与える。
- 2) 英語を機会的にではなく、コミュニケーションの手段として使う活動。
- 3) 言語活動は、分析、理解、一般化、記憶などによる認知方略による学習だけでなく、学生の自我や感情的側面とのかかわりがより深く、感情移入を誘う習得活動であることが好ましい。

注

- 1) Krashen, Stephan D. (1982) *Principles and Practice in Second Language Acquisition*. Oxford, England: Pergamone Press. pp. 12, 13
- 2) Krashen, Stephan D. (1985) *The Input Hypothesis*. New York: Longman pp.1-3
- 3) Noam Chomsky. (1975) *Reflections on language*. New York: Pantheon Books.
- 4) Schumann, J. H. (1978) *The Pidginization Process: A Model for Second Language Acquisition*. Rowley, Mass.: Newbury House.
- 5) Krashen, S. D. *The Input Hypothesis*. pp.43-52
- 6) S. D. クラッシュェン, T. D. テレル著 藤森和子訳 (1986) 「ナチュラルアプローチの勧め」 大修館書店 pp.5, 6
- 7) 前掲書 pp.119, 120
- 8) Krashen, S. D. *Principles and Practice in Second Language Acquisition*. p69
- 9) Rivers, W. M. (1981) *Teaching Foreign Language Skills*. Chicago: University of Chicago Press.
- 10) 藤森和子訳 前掲書 pp.10-15

- 11) 藤森和子 前掲書
- 12) Asher, J. (1977) *Learning Another Language Through Actions: The Complete Teachers's Guidebook*. Los Gatos, C. A.: Sky Oaks Productions
- 13) 長澤邦紘著(1988)「コミュニカティブ・アプローチとは何か—その理論と展開」三友社出 pp.159-162
- 14) 前掲書
- 15) Anger, L., C. Pavlik, & M. K. Segal,(1987) *On Your Way*. N. Y.: Longman.
- 16) McSwain, M., Morihara, B.(1988) VIDEO *Living and Working in America. Vancouver, Wash.*: Vancouver International Academy.
- 17) Corman, A.(prod.) Jaffe, S. R. Columbia Pictures *Kramer vs. Kramer*

参考文献

- Butler, Christopher.(1985) *Statistics in Linguistics*. Oxford: Basil Blackwell Ltd.
- Chomsky, N.(1968) *Language and Mind*. N. Y.: Harcourt, Brace Jovanovich.
- Clark, Raymond C.(1980) *Language Teaching Techniques*. Brattleboro, Vermont: Pro Lingua Associates.
- Johnson, K. and Morrow, K.(eds.) (1981) *Communication in the Classroom: Application and Methods for a Communicative Approach*. Longman.
- Johnson, K.(1982) *Communicative Syllabus Design and Methodology*. Oxford: Pergamon Press.
- Livingstone, C.(1983) *Role Play in Language Learning Essex*: Longman.
- Moskowitz, Gertrude.(1978) *Caring Sharing in the Foreign Language Class: A Source book on Humanistic Techniques*. Rowley, Ma.: Newbury House Publishers
- Steinberg, D.(1982) *Psycholinguistics: Language, Mind and World*. London: Longman.
- Stevick, E. W. (1976) *Memory Meaning and Method*. Rowley: Newbury House.
- Widdowson, D. A.(1978) *Teaching Language as Communication*. Oxford University Press.
- Woods, A., P. Fletcher and A. Hughes.(1986) *Statistics in Language Studies*. Cambridge University Press.
- Wordell, C. B.(ed.) (1985) *A Guide to Teaching English in Japan*. Tokyo: The Japan Times Ltd.